

第二の雲

自分の子や孫が生き延びられるか、地球が生存する価値のある惑星なのか、そうした問題について人類史上初めて真剣に悩んでいるのが私たちの世代である。

こうした不安を抱いたのは他でもない。種としての生存を巡って、私たちの頭上に二つの暗雲が垂れ込めているからである。いずれの雲ももたらす結果は同じだが、私たちは全く別のものと見なしている。

雲の一つは、全人類を破滅させる核の危機である。この危機は広島の上空をおおったキノコ雲の中で初めてその姿を現した。第 2 次世界大戦中の 1945 年、この町に史上初の原子爆弾が投下された。誰もが核の危機は紛れもない現実だとわかっている。だが、国々には核兵器が山と積まれ、そして政治家は政治家で、どうしようもない過ちたびたび犯して来た。そして今日の世界の外交の大部分は、核の脅威に基づいて形づくられている。

二番目の雲は、環境破壊の危険である。種の大半が世界中で徐々に絶滅している事こそ、この破壊をもたらす潜在的な原因だ。しかし、核による破壊による大虐殺は悪いと全員の意見が一致しても、種の大規模な絶滅を巡っては一致が図れず、大量の絶滅は現実のものなのかどうか、仮に起きているとしても本当に大事にいたるものであるのかどうか、私たちの意見は食い違いを示している。

国際鳥類保護会議（ICBP）が公表した数値は、過去の 2.3 世紀の間にかけ、全世界で 1%の鳥類が人間によって絶滅に追い込まれた事を示している。そしてこの事について人々はどのように考えているのだろう。

経済学者や産業界のトップ、一部の生物学者や一般の人たちは、1%は多く見積もりすぎで、実際の損失はずっと小さなものだったと考えている。もし現実には起きていた事だとしても、こうした人たちは、鳥類の 1%を失ってもたいした問題ではないだろうと高をくくる。

一方、保全生物学の研究者や環境保護運動の関係者たちは、1%は低く見積もり過ぎで、実際の損失は大きいと考えている。また、大規模な絶滅によって人間の生活の質と可能性は著しく損なわれると考えている。

この二つの見方はどちらが真実に近いのか？それによって私たちの子どもや孫の将来は大きく違ってくるだろう。

人間はこれまでどれだけの種を絶滅させてきたのだろう。さらにこれからどれだけの種が死に絶えてしまうのだろう。ICBP が示している現実のデータは 1600 年以降、鳥類は 108 種が絶滅、現在およそ 9000 種が生存しているとしている。そしてこのほぼすべての絶滅に人間が深く関わっていたことを忘れてはならない。私たちは 1600

年以前にも立ち帰り、どれだけの種が人間によって絶滅に追い込まれたのかを調べたうえで、今後の将来においてどれだけの種が絶滅してしまうのかを予測しなければならない。その上で、いったいどのような違いを私たちはもたすことが可能なのか。それを問いたすことが出来るのだ。

（進化生物学者ジャレド・ダイヤモンド「第三のチンパンジー」より引用・補筆）